

自分の「腕」が品質を決める… そこに面白さを感じ、 責任を全うする

文珠川さんは、全く違う分野から転職し、金属熱処理の仕事に携わるようになりました。これまで努力を重ねて腕を磨き、金属熱処理の仕事にこそいそんできました。その技能は各方面から高く評価され、45歳という若さで平成25年度「現代の名工」に認定されました。文珠川さんはそこに満足することなく、日々精進しています。

● 熱処理技能者 文珠川拓実さん

もんじゅがわ・たくみ ● 1968年兵庫県生まれ。幼少時に東京に移る。商業高校卒業後、大手レストランに就職。同レストランを退職後、株式会社上島（かみじま）熱処理工業所に入社。現在、同社製造部係長。特級金属熱処理技能士。平成23年度東京都優秀技能者（東京マイスター）、平成25年度「現代の名工」に認定される。その優れた熱処理技術で「下町ボブスレー」として話題になったボブスレー製作にも携わった。



料理の道から金属熱処理へ

——現在の仕事に就かれるまでの経緯を教えてください。

文珠川 私は商業高校の出身です。高校卒業後は大手のレストランに勤めました。料理に関心があったのでレストランに就職したのですが、2年あまりで辞めてしまいました。それというのも職場の実態が私の思いとは大きく隔たっていたからです。私は料理を覚えるには厳しい修業が必要だと覚悟していたのですが、そのレストランはほとんどがシステム化されていて、料理の技術をきちんと身につけることはできないのではという思いが日増しに強くなっていったのです。

アルバイトをしながら次の仕事を探しているときに、たまたま新聞に載った上島熱処理工業所の求人広告を目にしたのです。

——料理とは全く違った分野の職種ですね。

文珠川 しかも私は工業関係はとても苦手という意識がありました。事実、中学校のときの技術の成績はあまりよくありません。それでも応募したのは求人広告にあった「やる気次第」という言葉に魅かれたからです。不安がなかったわけではありませんが、ともかく応募してみようと思ったんです。21歳を過ぎたころでした。

——全く未知の分野に踏み出されたこと

いうことですね。実際の仕事に就かれて、それまでの自分の思いとの隔たりはありませんでしたか。

文珠川 厳しい仕事であることは覚悟していましたが、そのようなことで悩むということはありませんでした。むしろ、自分が考えていた通りの仕事でした。

確かに技術系の分野は苦手だったけれども、ものづくりが嫌いだったわけではありません。むしろ好きでした。料理の道に進もうと考えたのも、広い意味でのものづくりだったからかもしれません。

仕事に集中し

期待通りの製品をつくる

——金属の熱処理には、大きく分けて「焼ならし」「焼なまし」「焼入れ」「焼戻し」の四つの種類があるそうですね。

文珠川 ええ。入社後2年あまりは先輩社員の指導を受けながら、焼入れの仕事に従事し、熱処理の基本を教わりました。今は焼戻しを担当しています。

——焼戻しという仕事の面白さややりがい、どのようなところにあるのでしょうか。

文珠川 焼戻しというのは、焼入れ後に硬いけれどももろくなった金属の粘



焼戻しは温度と時間の管理が重要で、気を抜くことができない。

りを強め、靱性を高めていく仕事です。見た目には焼入れのような派手さはないけれど、製品の仕上がりを決める重要な役割を担っています。一つひとつの製品は大きさも形も違います。また用途によって求められる硬さも違う。お客様から求められる硬さにするには、どのような温度でどれくらいの時間をかけて焼戻しをすればよいのか、私が決めます。この「自分で決める」ということが面白いのです。この仕事に就いた最初のころはいろいろな温度にすれば指定された硬さになるのかわからず苦労しましたが、今ではほとんどの場合、ぴったりと合うようになりました。それがやりがいでもあります。

*金属熱処理とは、加熱と冷却を組み合わせることで金属素材の形を変えずに、その用途に見合うように性質を変化させること。金属熱処理には大きく分けて「焼ならし＝通常の状態にする」「焼なまし＝軟化させる」「焼入れ＝硬度を高める」「焼戻し＝粘りを強め、靱性を高める」の4種類がある。焼入れ後の金属は硬いがもろくなっているため、焼戻しによって靱性を高める。



文珠川さんは、後輩の指導をする際には、一つひとつの工程についてその必要性を説明するようにしている。

——厳しさはどんなところにありますか。

文珠川 高温の金属を扱う仕事なので、夏は大変ですね。また、焼戻しの時間をどのように確保するかも苦労するところですよ。先ほど申し上げたように、焼戻しは焼入れの後の工程です。そのため焼入れの進捗状況によって、焼戻しの時間帯も変わってきます。最も適した時間に焼戻しをするため、場合によっては土曜や日曜に出勤することもあります。しかし、それがつらいということはありません。この仕事が好きだからです。

——仕事ではどんなことを心がけていらっしゃいますか。

文珠川 とにかく集中して仕事をするということです。仕事をしているときは呼

びかけられても気づかないくらいです。「集中していなかつたなあ」と思ったら、どこかに問題がないか念入りに確認することが癖のようになっています。自分では「絶対大丈夫」と思っても、何回も確認します。

焼戻しでは温度と時間の管理が大切なのですが、そこで手を抜いてしまうと必ず結果に現れます。自分の不注意で万が一にも品質を落としてしまえば、会社の評価につながってしまい、その命運を左右しかねません。そういう意味では「製品の一つひとつが常に試されている」といっても過言ではありません。

——会社では技能士の育成に力を入れ、資格の取得を強く推奨しているようにですね。

文珠川 私も入社して間もなく、資格取得のために先輩からの指導を受けました。また外部の講習会にも参加させてもらいました。こうした勉強が資格取得には大変役に立ちました。そうして金属熱処理技能士の2級と1級の資格を取りました。正直、勉強は好きではありませんが、自分なりに必死にがんばり検定に備えました。その後、さらにレベルアップをしようと考え、特級の資格も取りました。

「面白い仕事」に出会うことで 幸せになれる

——平成25年度「現代の名工」にも選ばれましたね。

文珠川 正直、いささか戸惑いました。授賞式に参加したら、ほかのみなさんを見るからに「名工」という雰囲気をもった方ばかりでした。私は45歳で、「名工」と呼ばれるにはまだまだ若輩ではないかという思いがあります。しかし、せっかくなので機会ですからこれを励みとしてさらなる精進をしていきたいと考えています。

——後輩を指導するときは、どんな点に注意していらっしゃいますか。

文珠川 「これをやってくれ」というだけではなく、なぜその作業をしなければならないかを説明するようにしています。熱処理の一つひとつの作業にはそれをしなければならないきちんとした理由があるのです。それを理解し

てもらったことで、その作業の大切さがわかり、技能も身につくと考えています。

——近年、若い人たちの就職がなかなか難しくなっているようですが、面白い仕事と出会うという経験も少なくなっていると感じます。そのような環境の中にある若者へのアドバイスをお願いします。

文珠川 先ほど申し上げたように、私は転職し、その結果として「面白い」「好きだ」といえる仕事に出会いました。そういう意味では幸運だったのかもしれません。ただ、厳しい環境の中でも面白い仕事に出会うための努力は必要ではないでしょうか。

しかし、入社数カ月で辞めてしまうのは感心しません。その仕事が本当に自分に合っているかどうかを見極めるには少なくとも1年や2年かかるのではないのでしょうか。同じ会社で数年後に面白い仕事に出会うかもしれないし、同じ仕事でもある程度の時間が経ってからやりがいを感じるようになる可能性もあります。

私はそれまでとは全く違う分野に進むことで、面白いと思える仕事に出会うことができました。どのようにして仕事の面白さと出会うかは、人によっても違いますが、環境によっても異なるので一概にはいえなと思います。ただ面白い仕事に出会うことで、人は幸せになれるということは確かです。私がそうですから。